

東京都交友会 秋の大会 一般公開講座

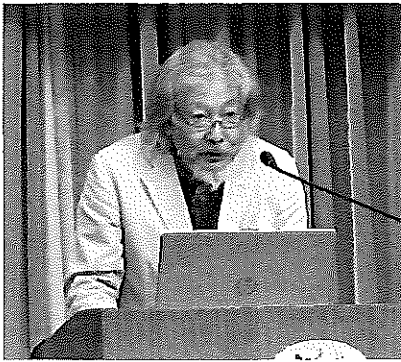
「徳川将軍十六代が

基盤を築いた現代の東京

—その移り変わりを知る—

講師 岡本 哲志 氏

(元法政大学教授)



岡本です。よろしくお願
いいたします。標題にも書
いてありますように、徳川
将軍は十五代ですが、基盤
を築いた将軍は大体六代
ぐらゐまで、家宣の頃まで
です。本日は、そこまでの
お話をしていきたいと思ひ
ます。

今日の流れですけ
れども、当然家康は外せな
いということ、レジュメ
に示した流れの中で話すこ
とになります。これはお手
元の資料にありますので、
見ていただきながらお聞き
ください。

1. 一大名から初代将軍と
なつた家康の時代

最初の家康の頃になり
ますが、家康は実際のよ
うに考え江戸城と江戸をつ
くつていたかはよく分かり
ません。よく分からないとい
うよりも、具体的にこれを
やっつてこうしようとかい
うビジョンを明確に史料に示
していないところがあつて、
よく分からない。ただ、そ
の後に江戸城と江戸が形づ
くられてきた背景を見てい

くと、家康はこんなことを
考えていたということが見
えてきます。まず1番目
は家康の業績としてお話し
したいと思ひます。6つ
くらいに分けてお話しします。
話題は幾つもあつて、これ
は厳選したのかというとな
常に難しいですが、なるべ
く分かりやすくお話しでき
ればと思ひます。

最初に1の江戸のまちを
つくる手掛かりとして家康
はどう見ていたのかとい
う話です。この写真は田安御
門の所、手前が牛ヶ窪、奥
が千鳥ヶ淵になります。こ
の風景というのは皆さんも
よくご存じの風景だと思ひ
ます。これすごいですよ。

牛ヶ窪に滝のように水が流
れ落ちてゐる。これ見えま
すかね、赤の矢印。こうい
うふうに水が流れてゐる。
これはものすごいことだ
と思ひます。

どうしてものすごいと思
うかと言ひますと。この左
の地図、これは明治16年に
参謀本部が作つた地図です。
2メートル単位のコンター

で高さが分かちます。ここ
十数年、いろいろな人たちが
衛星から地形のデータを
引つ張つてきて本を書いて
いますが、どうも年取るとそ
ういう衛星のデータがあん
まりうまく使えなくて、私
はもうローテクのこの明治
16年の地図を愛用していま
す。これをよく見てみます。

と、右の写真は上が牛ヶ窪、
下が千鳥ヶ淵です。水面の
高さは牛ヶ窪が3.5メート
ル、千鳥ヶ淵が15メートル。
これもものすごいですよ。
11・5メートルも水位差が
あります。

左の地図(明治16年の皇
居周辺の地形図)で見えて
ただくと、写真2(九段方
面から千
鳥ヶ窪と皇
居を望む写
真)の矢印
の所、千鳥ヶ
淵から先は
ちよう土盛
りされてい
る部分、こ
れは人工的
に埋めてい

ます。千鳥ヶ淵の水が牛ヶ
窪に流れるように大規模に
都市改造をしてゐるのです。
この図は大胆に原地形を作
り直したものです。この原
現地形の図は家康が入つて
くる前にどういふ状況だつ
たのかというのを類推して
作成したものです(図1)。

ですから掘割も全くつく
られてゐない、基本の地形
です。千鳥ヶ淵あたりから、
現在の皇居東御苑(旧本丸)
と新宮殿(旧西の丸)の間
を局沢という沢が流れて日
比谷入江まで流れ込む。そ
の局沢を千鳥ヶ淵で掘留め
て、蓮池濠とし、また台地
を大胆に掘り込み、乾濠と
か平川濠を整備します。先

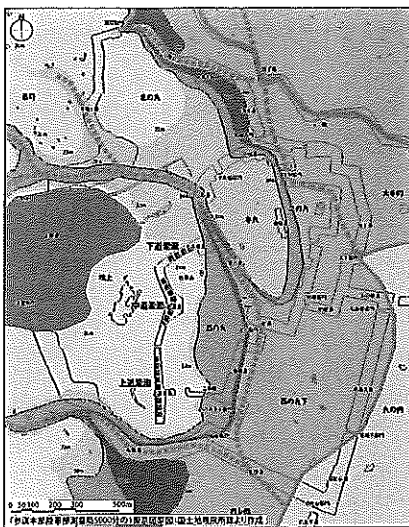


図1. 江戸城とその周辺の原地形

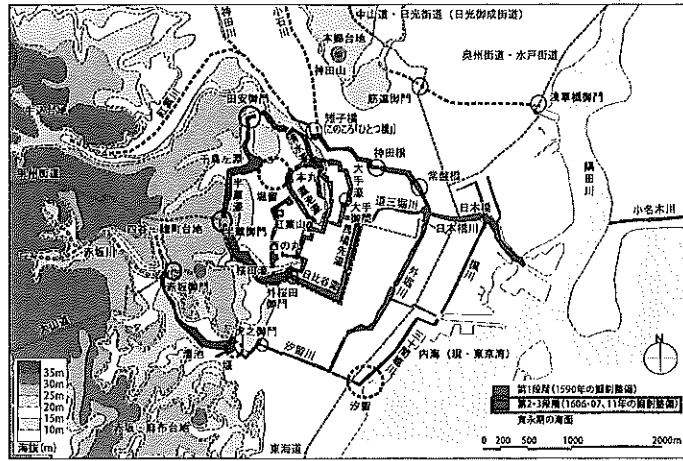


図2. 大坂の陣以前に江戸城の守りを完成

もう一つ盲腸のように西堀留川というのをここに掘ります。西堀留川といっ

てあまりイメーがわかないかもしれませんが、先ほどの青でなく赤の所。半蔵御門のある内濠から東側の所を、1600年から大阪の陣が始まる1614年の間にほぼ完成させています(図2)。

江戶城天守閣と関係しているというのをこれからお話ししたいと思います。関係してなかったら何で家康は天守閣をあそこにつくったのかということがよく分からないということが

これは葛飾北斎の富嶽三十六景、これが不思議なのは、明暦の大火で天守閣が焼け落ちて台座しかないのに、天守閣があったあたりに三重櫓を描いています。当然日本橋から見ると天守閣が正面に見えて、左側斜め先に富士山、これは構図的には合っています。ただし、三重櫓が正面に見えるように描いています。何で北斎

ほどの千鳥ヶ淵も北側の北の丸公園沿いは人工に掘り込んだものです。こういうことをしながら江戸城がつくられていきます。

2番目。家康は1590年に江戸に入りますけれども、それから関ヶ原の戦い

3番目、大阪の陣まで。大阪の陣というのは、これ大変ですよ。豊臣家がつぶれるか、徳川家がつぶれるかという大変な状況の時

1の4番目ですけども。江戸城天守閣というのはよく皆さんご存じの所ですが、日本橋も皆さんご存じですね。日本の道路原点です。道路原点は、道路の真ん中にあります。この日本橋が

になります。日本橋川を軸に日本橋と慶長度天守閣を結んでいるのがこの図です。先ほども言いましたが、日本橋川というのは人工の川で、堀割です。ですから、どこを掘っても当然いいわけですが、日本橋の所で「く」の字に曲げています。これは大変なことで、もう家康が入府した時から日本橋川はこういうふうなルートで整備したいと考えていました。日本橋はここに位置付けようと、天守閣はこの辺だよなということを既に決めた構想の中で成立していきます。

大事なもの塩を運び入れる最初の入り堀でした。

描いたかということですが。実は、北斎は街を歩いていて、この富士見櫓、これは明暦の大火以降は天守閣の代わりだったことから、富士見櫓を天守閣跡にもっていきたいと、そういうイメージがあつたんじゃないかと思えます。

家康はかなりストリートな舞台に拘っていたと考えられます。これが5番目です。舞台というのは、1つは都市をつくるランドマークです。京橋から日本橋へ歩いていくこの道(旧東海道、中央通り)、これ真つすぐ行くと筑波山に当たります。今は見えませんが江戸時代は見えました。こういう通り通りに富士山を見せたりしています。ここの本町の辺り、駿河町の辺りは、富士山がよく見えるように設計したというのは、絵に描かれていますので、それを見ればよく分かります。もう一つ銀座ですが、銀座から新橋へ歩いていくと、ちょうどこの右の写真ですね。真つすぐ銀座通り(旧

東海道)が通っていますが、その先に芝増上寺の小山を当てています。小山というのは古墳だったところですね。このように町のポイント、ポイントにランドマークをつくっていったというのがあります。

もう一つ家康が拘ったのは、庇地といって京間一間というのは2メートルぐらい。2メートルの庇をつくらせません。こんな感じですね。これはパレードの時に飲み食いができるそういう敷敷の環境をつくらせる。ですから、ずっと何キロもこういうプロムナードみたいな敷敷みたいな所を、これは朝鮮通信使ですけども、そういう人たちが歩く、そういう舞台設定としての庇を考えています。

ただ、京橋まで来た時に、本来は京都にならって、民地と公儀地、公の土地を半々に出すというのは、一般的でしたが、どうも家康は庇地をちゃんと出さないのですね。銀座は全部公儀地でやるというふうにして、

京間一間全部公儀地だったということになります。京橋まで1600年ぐらいは京都の丈というのを非常に意識して、メインの道を丈でつくります。これはなかなかしたたかですよね。実際見たって丈なのか田舎間かよく分からないけれども、丈でしつかりとつくります。銀座に来ると全部京間です。先ほども言いましたように、庇を京間一間、2メートルを是が非でも出してくれという、そういう強い願いがあつて全部公儀地にして庇を出させるようにしています。

銀座というのは世界でも名だたる商業空間ですが、実はこの銀座通り、皆さんも今度歩かれる時に、本当かどうか確認してください。これ銀座7丁目の西側です。今、虎屋さんがここですね、建て替えてこの写真の風景ではないですが、大体銀座というのには京間五間。ですから幅10メートルですね。京間五間というのは、銀座、今土地を調べると間口10メートルの土地が全体の2

割以上あります。これは大変なものですよね。2割以上。その敷地に、このよう

な小さな建物が建っている所は江戸時代から町屋が並んでいて、それを一つ一つ統合していくと、こんなふうになつていきます。ですから、間口10メートルの所がたくさんあつて、それは寛永の時代までさかのぼっていくという、そういうスケール感の中で銀座の街はできています。

2. 大御所家康と二代将軍秀忠の時代

家康が大御所になるというのは、ここにも書いてあります。1605年です。ですから、征夷大将軍になって2年しか將軍をやっていない。お飾りでいいからとにかく秀忠は江戸城にいらと。そこで「將軍になつとけ」みたいな話だと思えますけれども、それから3年後に家康は駿府へ行ってしまします。

そういう中で江戸をシンボリックに描いていくとい

うことで、家康はすごく慎重な人ですよ。見た目で日本橋から天守閣への軸をつくりますが、それでは飽き足らずに神田明神を移転させ、それから日枝神社を移転させて、天守閣の両側に鬼門を置いて天守閣を守る軸としています。将門塚というのがありまして、ここから分離する形で神田明神は外に出て鬼門の軸になります。

将門塚の話をするとき長くなるので、とにかく鬼門に、民衆に慕われている神田明神と武士がサポートしている日枝神社を据えています。

これをやっていくのですが、これで大丈夫かということが浮上します。今、江戸城本丸跡がある所というのは20メートルに満たない高さです。周辺と比べてかなり低い。あまり高くない所を掘割で区切っても、守りとしてはいいですが、威厳が保てない。そこで何をしたらかと言いますと、江戸城本丸を高く見せる工夫を

します。1つは江戸城東側。ここは旧西の丸下のところで、すけども、丸の内よりも高く見せるために石垣をつくります。ですから、裏に回るとこのようにハリボテ状態になっていきます。これは高く見せるだけではなく、鉄砲隊が撃ち下しやすいうようにしている工夫ですけれども、これが高く見せる工夫の1つです。

これは先ほどの原風景で、台地を切断して堀をつくっている様子がわかります。でも、江戸城は20メートルしかない。それなのに、九段は24メートルです。4メートルも高い所から4メートル低い20メートルのところにいくのに高く見せることができるのかという話になります。ですから、高く見せる工夫をしなきゃいけないという難題が徳川幕府に突きつけられた重要な命題となります。

これは千鳥ヶ淵。ここが田安御門の所で、22メートルです。そこと比べると、24メートルある九段側より2

メートル低い。九段と逆側の北の丸を高く見せるためにどうしたかと言うと、3メートル土盛りして、さらに5メートルの石垣を土盛りの上に築きます。ということは8メートル高くなる。ですから、24メートルの所から30メートルの高さを見上げさせる工夫をしています。

これが江戸城に近づいて来て次に何をやったかと言うと、この北の丸公園、歩いていくと何で下り坂になっているかと思いに思う人もいます。22メートルある北の丸より本丸を高くするために台地を削って低くしています。削って低くした所から江戸城本丸を見上げさせるために、さらに石垣を本丸側に築いていきます。15メートルも高い場所に本丸があると錯覚させます。

24メートルある九段の所から来たら30メートルぐらい高くなって、それからさらに25メートルぐらい高くなっていく。最終的には海

抜50メートルぐらいの高さで江戸城本丸が見えてくるイメージにさせられる。こういう特殊な操作で気付かれないうちに江戸城本丸を高く見せています。

結果こうなりますね。ここに60メートルを超える天守閣がそびえると、もう現代東京の100メートルの超高層ビルどころではなくなってくる。ここでしっかりと威厳を見せつけている。

もう一つ重要な点は、江戸城を水害から、あるいは江戸の武家地を水害から守るために何を工夫したのかということがあります。これは1632年に作られた「豊嶋郡江戸庄図」というものです。詳細に描いている地図は、これが最も古いと言われています。そこで気になる場所は、ここです。これは後でこの地図、多分東京都中央図書館ではこの地図をアップしていますのでご確認ください。

ここに書いてある橋名は上が一ツ橋、下が雉子橋です。これ不思議ですよ。今

この辺の地理をよく知る人は一ツ橋って雉子橋じゃないかと思われの方がいます。当然ですね。雉子橋は今、一ツ橋です。一ツ橋は雉子橋です。一ツ橋というのは水が集まって1つにまとまることを一ツ橋と言います。ですから水が集まってきた所が「ひとつ橋」です。

じゃ、何で雉子橋かと言うと、これも長くなりますが、実は、御三卿ができた時に、もともとの雉子橋の近くに御三卿の一ツ橋家ができました。雉子橋家がちょっと何か腑抜けて様にならないねということ橋をトレードしてしまいました。ですから、一ツ橋と全然関係ないところが雉子橋、雉子だつた位置に一ツ橋が来るということになってしまいました。今の雉子橋は本来洪水を起こしやす場所の一ツ橋なのに、雉子橋になってしまいました。

これヒルサイドテラスから見た風景で、正面に帯曲輪というのがあります。これは平川御門と竹橋御門の人

たちが戦闘になった時に、うまく融通を効かすためにつくりました。ただ、それにしてはこれ相当頑丈です。でも、基本は洪水から守るための堤です。ですから、奥にも平川濠があつて、手前にも平川濠があると、この真ん中を貫いて水害から守っています。

3. 家康亡き後、二代将軍秀忠の時代

お話しすることになって、いる8つの大きなテーマの3番目です。家康が亡くなった後、秀忠はどうしたのか。どうも秀忠は家康の七光を利用して生きてきたのかという考えがあります。ほんとはそのような気もしないで、康はしっかりとして徳川家の中心に据えるために、死しても秀忠をサポートするために、この紅葉山に紅葉山東照宮というのを築かせます。

明治になってから紅葉山東照宮はなくなってしまうのですが、それまではかなり象徴的な場所でした。

江戸城の中でこの紅葉山が一番高い。ですから、見下ろせる場所というのは紅葉山です。左の図は紅葉山東照宮の配置を描いています。この部分が家康の霊屋です。それから秀忠がいて、六代將軍までしかここに霊屋がつくられていません。家康が一番高い紅葉山にいます。この紅葉山で家康はらみ続けています。

これは『江戸図屏風』で、ここに家光が建てた天守閣があります。秀忠は西の丸にいますが、高さを競いながら家康がいて秀忠がいて、それから家光がいてという形になります。

4. 大御所秀忠と三代將軍家光の時代

秀忠が23年に大御所になります。大御所になるというのは、これどうも約束されているみたいで、將軍になるのは家光がまだ19歳です。何でこんな若くて將軍になるのかという話があります。秀忠は大御所。これは家康のような大御所

ではなくて、自分の表だったメインの立場を引いた。ただ、この時にかなり重要なことをやっています。

1つは、大坂の陣が終って西軍の將士たちをどう江戸に配するかという問題と関わりながら、ちょうどこの頃神田川を東遷させ、隅田川に直接流すようにします。この神田川の東遷と霞ヶ関が非常に重要な関係を持っているというのが今お話ししたいことです。

それは何かと言いますと、丸の内を非常に安全にして霞ヶ関よりも優位性を持たせ、そこで霞ヶ関に西軍の將士たちを集めて集中させます。分散すると何か勃発的にいろいろあるんで集中させます。でも、高さがほぼ霞ヶ関と丸の内が同じだと言う時に、丸の内側に石垣をつくって高く見せませ、これですね。

これは日比谷公園に行くとも今でも見られます。丸の内側を高く見せる工夫です。これは心字池と言われて内山下濠だった堀割です。この

右側が霞ヶ関です。霞ヶ関と丸の内の境界に日比谷御門もつきます。これは伊達政宗が整備します。この御門は特殊です。追い落としというのがあって、それから本来は濠を渡す場合は木橋ですが、木橋じゃなくて普通の土盛りした道にしています。これは丸の内から攻めた時に、霞ヶ関側の敵軍が橋を焼き落とすと攻めきれないということになり、それをなくす工夫をしています。追い落としは霞ヶ関から攻めて来た武士をこかく入れさせないようにするという仕組みをつくっています。

秀忠と家光の共同作業の4番目が寛永寺です。秀忠は

どうしても寛永寺をつくりたいということ、天海に土地を与えてつくり始めます。ただ、家光が將軍になった頃に本坊ができて、この寛永寺が正式に寛永寺となります。この寛永寺と天守閣が関係あるということ、この段階で見つけ出すのは

なかなか難しい。本坊をつくっても天守閣と関係しているかどうかはよく分かりませんよね、2つの点です。ただそれが綱吉の時に根本中堂も山門も、全部この軸の上に乗せてつくっている。これは逆算ですけど、天守閣と本坊は軸を通してという話になります。

ただ、天守閣というのは三人三様で家康がつくった慶長度の天守閣というのは日本橋からの軸がちよつとずれている。これ右の図(図3)ですけれどもちよつとずれていますよね。それから寛永度の天守閣、これは家光の天守閣ですけども、こ

れも日本橋からちよつとずれている。何でこんなちよつとずれているのか。元和の秀忠、これはもう両方ともびったり軸が合っている。問題はここに書いてあります。空堀が影響しているという話があります。これは江戸の資料じゃ見つからないんですが、この元和天守閣を築いた広島藩に資料(広島藩編さん『自得公済美録』)があつて、それを見るとここに空堀があつたということが分かります。

5. 將軍としての独自性を見せる家光の時代

5番目で、いよいよ家光

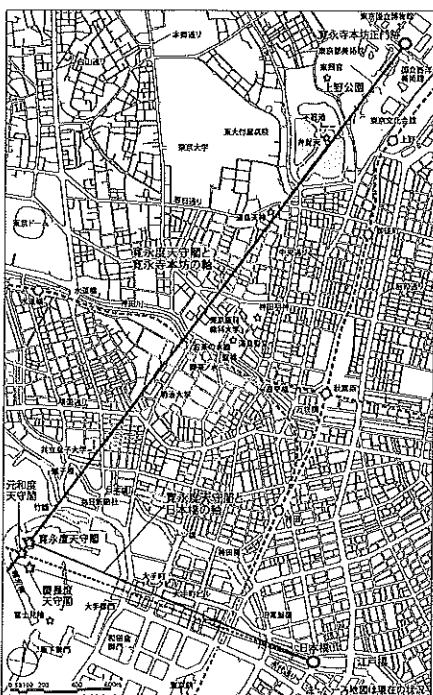


図3. 天守閣へ向けられた2つの軸

が私の番だということになります。何をしたかと言うと、秀忠の業績を消していく、つぶしていくということをやっています。それに関係して、朝鮮通信使の人たちの来訪を、家光はかなり密度高く迎え入れています。4回それから5回というのは、この間が大体7年、短いですね。4回目の朝鮮通信使の時に何があつたかと言うと、元和の天守閣がまだ建っていて日光東照宮はほぼ完成していました。7年後にもう一回呼びます。日光東照宮は見せませんでした。第5回目の朝鮮通信使は、7年後に2つとも見せません。どうも見栄っ張りの家光という感じはしますけれども、こういうことをします。

亡くなる前に、災害がいつぱい起きてしまい、方向転換しなければいけないんです。日光東照宮というのは、家康は質素でいいと、きらびやかにするなという遺言で亡くなっています。秀忠は忠実に質素できらびやかにしない日光東照宮を築きます。それを家光は冗談じゃないと。日光東照宮はきらびやかな方向でいこうと、その決断したのが一番下の絢爛豪華な自身が眠る大猷廟の建設です。自分が日光に行く時に簡素じゃ困るといふことですね。これは芝東照宮に秀忠が眠っています。それは絢爛豪華。これまでの簡素な風景と同じにしたくないということ。日光全体をきらびやかにすることになったんです。

起元」というのが1803年につくられますが、これは玉川上水が整備されてから一世紀以上も後の幕府によつてつくられた記録です。書いてあるものを忠実に表現すると、玉川上水は1年でできたことになりません。ほんとはそうなのというのが今回の話です。

玉川上水をつくる時に、これは玉川上水と外濠は関係あるの、ないのという話も出てきます。外濠の整備の具体化は寛永11年。ですから、外濠が整備されるずっと前にお寺を移転します。ここの番町とか、あるいは紀尾井町からお寺を相当数移転します。相当数移転するというのが大体寛永11年ぐらい。1634年そこで移転していきます。この移転をした後に、紀伊とか尾張とかの屋敷をここに配置していきます。相当に大規模な都市改変をして、この外濠ができていくということとを考えていく必要があります。

もう一つは、外濠というのは棚田のように高低差を付けています。この図のように真田濠からずっと水が流れるように整備しています。こういう意図的な整備があつて町ができ、江戸ができています。この堀割の循環システムの基本が、玉川上水の水が外濠に入れないと成立しないというのが先ほどの流れです。玉川上水の水が外濠に入つて来なかつたらどうなるのかというのが、次の図です。

真田濠はこの左下ですね、上智のグラウンド。いつまでも空堀です。それから市谷濠ですね。市谷濠には今、水が入っています。市谷濠もいつまでもたつても空堀です。この市谷濠、低かったのをわざわざ高くしています。空堀になるように整備しています。牛込濠はもとも水位の低いところなので、黙つても水がたまりません。ですから、真田濠と市谷濠は玉川の水が入らないと全然役に立たない。

ですから、水がたまつた濠ではなく、水がたまらない、役に立たない場所をわざわざつくっているというのは、普通じゃ考えられない。わざわざ空堀になるように濠底を上げてつくっているというのも、ちよつと考えられない。これは少なくとも玉川上水の水を入れて棚田のような状況から水が流れるようにする。そういう仕組みがあつたということが考えられます。

7. 五代將軍の時代

これで五代將軍まで来ました。五代將軍綱吉、この人はお父さんの家光に頭を抑え込まれた人で、儒教を叩き込まれています。お犬さまとか言われていますが、儒教を綱吉に植え付けたのは、兄の家綱に悪いことしないようにするためで、父の家光にお前はちゃんと儒教を学べと頭を押さえてつけられ、非常に気持ち曲がり続けたのが綱吉。この人は随分マザコンなんです。將軍になつた途端に1年後、護国寺を建設します。これは家康のお母さんの伝通院をはるかにしのぐ規模をつくる。

ですから、綱吉、お父さんにもひいじいさんの家康にも

後ろ指を指されても、とにかく強引な態度を取り続けながらことを進めます。隆光の勧めで護持院までつくりまします。

この隆光という人は、長生きしていますので、桂昌院も綱吉も亡くなつてしまつて、最後はみじめな思いでこの護持院が焼ける姿を屋敷が五分の一になつて細々とした所で見ます。この屋敷はお茶の水の所です。ちようど護持院が焼けるところが見える場所にあります。そういうところで亡くなつて悲しい思いをする。

綱吉は赤で書いてありますが、修復した寺社は100軒、費用は推定70万両を使つただろうと言われています。幕府がお金出すのは天下普請の場合だと材料費だけです。人件費は出さない。他の大名が人件費を出していく。そうすると大体200万両ちよつと超えるぐらいのお金を寺社に使つています。200万両ちよつと超えるというのはいちどのぐらいの規模かと言いますと、大体元禄の頃だと100万両ちよつと超えたところが年間の幕府の総収入に

なります。

ですから、旗本から何から全部含めて100万両ちよつとですから2年分。今、東京の全予算の2年分を寺社だけに使いまくつたというのが綱吉です。嫌いな家光ですから、上野にあつた湯島聖堂をわざわざ今でもありますねー神田のほうに持つてきて、寛永寺と切り離します。

それと、天守閣は、綱吉の時代は明暦の大火で焼けて台座だけです。何で根本中堂も、山門もこの軸の上につくるのかという点が非常に奇異な感じですが。この軸をつくるためにわざわざ清水観音堂を移転させます。すぐそこにある播鉢山から今ある清水観音堂に移して軸が映えるようにする。そこまでして綱吉は天守閣を建てていません。全くそんな素振りを見せない。これはどうしてかというのは、なかなか難しい。

端に綱吉のもとに来て「大丈夫ですか」とか肩を摩りながら介抱している。天守閣どころじゃないですよ。家光が「すごい天守閣つくつたんだよ、みんな登ろう」と子どもたちに言つたら、多分綱吉だけ「僕嫌だ」とか何とか言つてしまふ。「おまえそんなんで將軍になれるのか。おまえは駄目だ」みたいなことを言つたかもしれないが、とにかく天守閣はつくらなかつた。

綱吉の將軍時代の後半は散々ですよ。もう災害だらけです。富士山で、宝永の噴火があつて、富士山の綺麗な裾野にこんな感じで、宝永山のでつぱりができちやいます。そういう中で、実は綱吉というのは徳松という子どもが産まれて、徳松を將軍にしようと思つたら、1683年に亡くなつてしまひます。それで、じゃあしょうがないと、鶴姫にしようというので鶴姫を紀州に嫁がして、ここから自分の血をつなげようと思つたんですが、残念ながら鶴姫も1704年に亡くなつてしまひます。

まいます。

どれだけ鶴姫を溺愛していたかと言うと、鶴姫が産まれてから鶴の字を書いたり、読んだりするのを禁止しました。ですから、この間に鶴の字が出てこない。それほど溺愛してしまひました。亡くなつた途端にもうどうでもいいやということ軍跡継ぎにします。

8. 六代將軍の時代

とがありますけども、最終的にはお世継ぎになつて將軍になる時も光圀の後押しです。ただ、ここで大名になつて28年間、これは今の日比谷公園のある所の桜田御殿という所に28年間、延々と大名です。それからお世継ぎになつて5年間。ですから、將軍よりお世継ぎのほうが長い。そこで彼は何をしたのかと言うと、2つの大庭園をつくる。これは東京にとつて非常に重要なことだと私は感じています。

重要というのは、1つは吹上御殿をつくつた。家宣は、熙子という御台所と結構仲が良かった。残念ながら御台所から男の子が産まれなくなつて女の子2人だけでしたけれども、仲が良かった。この5年間の中で西の丸御殿、それから3年9カ月本丸に来て、ここから吹上御殿に2人が仲良く歩くということで、この吹上に通つたという記述はいろいろと出てきます。

最後は浜御殿です。これはお父さんの綱重が下屋敷として与えられたのを、息子の家宣が御殿としてつくり上げて

いきます。御殿としてつくり上げていく中で、多分御殿は時代と共に消えていくんですよね。いろんなところに將軍の御殿がありますけれども、最後までちゃんとした形で残っている御殿は、今という浜離宮恩賜庭園だけです。

もっとすごいのは、この公園今でも汐入庭園だということがものすごいですね。NHKの番組で、常盤貴子さんとこの公園でテレビに出る機会がありました。その時に、「これ汐入だから海水を入れてよ」と言ったら、ちゃんとNHKのスタッフが海水を入れてくれました。ただ、「10倍速ぐらいにしないと潮が上がっている雰囲気が出ません」と言われたんですけれども、実際に汐入される池の映像を映しました。

この庭園には、御亭山こてやさんという山がありますが、これは築山が幾つかあるうちの1つです。浜御殿から西を見ると今、東京タワーが見えますが、ここに富士山が見えている。後ろ側を振り向くと筑波山が見えます。江戸時代は実際に見えた。ここに御亭山があります。御亭山は低い山ですが、頂上からちゃんと富士山が見えて筑波山が見えます。それが浜御殿にちゃんと御亭山としてあるということ、非常に面白いということです。これで最後になりますが、いろいろ話してきましたが、六代將軍バトンタッチしながらいろんな物をつくっていきます。堀割を巡っていきますと、この浜御殿、この赤の実線ですね。浜御殿から汐留川、堀留川を上がると、これは大体家康とか秀忠が整備しています。それからずっと上がって外濠は家光と家綱の共同作戦。それから神田川は秀忠と。何でここに家綱がいるのかと言うと、外濠を整備したために、神田川の最初の整備だけでは断面が足りなく、何回も伊達家に広くしろと言ったので、ここに家綱がいます。

じゃ家綱は何をやったの

と言うと、あんまり関わっていないのですが、隅田川に2つの橋を架けました。新大橋それから永代橋。これは江戸の隅田川5大橋のうちの家綱の時代だけで2つもつくってしまったという事で入れました。これを巡っていくと江戸の総構えが見えて、その要にこの浜御殿があると。ということで、家宣はたった3年9カ月ですが、しかも影が薄い人ですが、実は今の現代社会においては、非常に重要な緑地を残して生きてきた人と言えます。

燕の御茶屋とか鷹の御茶屋とか、この辺は家斉の時代につくられたのですが、ここに東京都がちゃんと茶屋を再現しているというのが、大変うれしいことです。多分皆さんのなかに関係する人たちが、あるいは直接関係した人がおられるかもしれないですけども、そういう中で東京の風景が少しずつ充実しているということになると思います。